少しずつ準備しよう

車で避難ダメ／防災用品カワイイ

地域とのつながりが深く、家族が多い中高年に比べ、若者は防災意識が低いと一般的にいわれる。「友達と防災の話をすることは少ないけど、そろそろ備えなきゃヤバい」。名古屋・大須を拠点に活動するご当地アイドルグループで、愛知県の「あいち消防団ＰＲ大使」に任命されている「ＯＳ☆Ｕ（オーエスユー）」のメンバーが避難ルートを実際に確認し、防災グッズもそろえた。（相坂穣）

名古屋みどり災害ネットの岡田雅美さん（左から2人目）と防災グッズを買うＯＳ☆Ｕの蝶野晶美さん（左端）、八角瑛子さん（左から3人目）、森咲智美さん（右端）＝名古屋市中区で

ＯＳ☆Ｕが体験

OS☆Uが体験した避難のイメージ

【大須で地震に遭ったら】

アニメやコスプレ、古着好きの若者が集う大須の街。ＯＳ☆Ｕが活動中、大災害が起きたらどう逃げるか。「まさみん」こと蝶野晶美さん(19)、「やすみん」こと八角瑛子さん(17)、「ぴーとも」こと森咲智美さん(20)の３人が、名古屋市大須消防団の河野章団長(77)と名古屋みどり災害ボランティアネットワーク代表の岡田雅美さん(61)の指導を受けた。

「訓練、訓練。南海トラフ地震が発生！」。ビル10階の所属事務所前で河野団長が叫ぶと、ＯＳ☆Ｕの３人は低い体勢をとった。「大須は密集地。火災が起きれば延焼するかも。安全な避難場所に移動しよう」。停電で動かなくなるエレベーターでなく非常階段へ。「夜なら照明が消え、ビル内は真っ暗。列をつくりパニックにならないように」と岡田さんが助言する。

屋外で河野団長が「避難場所は知っている？」と質問。３人は即答できないが、まずは大須の裏門前公園を目指す。落下物の恐れがあるアーケードや路地を避け、なるべく広い道路を選ぶ。「車の避難はだめ？」。ドライブ好きのぴーともが聞く。「東日本大震災では車が大渋滞した。消防車や福祉車両が動けなくなる。健康な人は歩くのが基本」と河野団長が忠告する。

５分で着いた公園の面積は2500平方㍍ほど。「１人１畳（1.6平方㍍）のスペースが必要だから、大須の住人が集中したら狭い。延焼などを見極め、市指定の広域避難場所に移ろう」と岡田さんが提案した。

最寄りの広域避難場所は白川公園。防火帯として整備された100㍍道路「若宮大通」をはさんだ栄にある。「名古屋高速の高架が倒れないか少し気がかりだけど、頭上に注意して渡ろう」。河野団長を先頭に足早に横断。緑の樹林帯に囲まれた約９㌶の公園の広場に着いた。「これだけ広いと確かに安全。やったー！」。３人が敬礼ポーズをとったのもつかの間。岡田さんが言った。「まだ安心しちゃだめ。備蓄がないと、苦しむよ」

【備蓄ショッピング】

一行は白川公園から、おしゃれな生活雑貨がそろう栄の「ロフト名古屋」の防災用品売り場へ。１人で３日間を生き延びるための物資を買ってみた。やすみんが「名古屋大の福和伸夫教授に、１日２～３㍑くらいの水が必要と教わりました。３日分だから最低６㍑ですね」。５年間の保存が可能なペットボトルを手にした。

「備蓄の食料も最近はずいぶん充実しているのよ」と岡田さん。棚にはペペロンチーノや五目ご飯、チャーハン。お湯や水を注いで１時間ほどで食べ頃になるという。「これなら普段、おなかが減ったり友達が遊びに来たときに食べちゃうかも」。商品選びを楽しむ３人の言葉に、岡田さんがうなずく。「良い考え。備蓄専用ばかりじゃなく、日頃食べるものを多めに買い、備える方法も注目されている」

水や食料以外に日用品も欠かせない。「地震が起きたら何日も入浴できない。アイドルの髪って長くてきれいだけど、きっとかゆくなる。これ良いわよ」。岡田さんが紹介したのは、水を使わずに泡で頭髪の汚れを落とすシャンプー。元はお年寄りの福祉用品だったが、東日本大震災の被災者にも好まれたという。

そのほか、若者の必須アイテムの多機能携帯電話（スマートフォン）を手回し充電できる機能が付いたＬＥＤライト付きラジオ、簡易式トイレ袋などを買い物かごへ。水や食料、日用品など20点余りで会計は締めて１万4000円。「防災用品っていうと堅いイメージだったけど、かわいい商品が多くて買い過ぎた？　私たちにはきつい出費かも」。現役大学生や高校生の顔を持つアイドルは、レシートを見つめた。

岡田さんが最後に３人にアドバイスした。「備蓄品を一度にそろえると、若い子には決して安くない。少しずつでいいから始めて。関心を持ち続けることが、命を守ることにつながるの」

訓練で大須消防団の河野章団長㊧と避難するＯＳ☆Ｕのメンバーら＝名古屋市中区で

実は多い20代の犠牲者

名大・減災連携研究センター
倉田和己助教

名古屋大減災連携研究センターの倉田和己助教(三三)は、大学院の学生時代にも防災サークルで活動した経験を持つ。「若者が地震に備えることが重要」と訴える。なぜ、若者なのか。その訳を聞いた。（中村禎一郎）

建物や家具の倒壊で多くの人が犠牲になった阪神大震災。特に高齢者が多く亡くなったが、実は二十～二十九歳の死者数も前後の年代に比べ一・五～二倍近かった。

最初に考えられる理由は、学生でお金がなく、耐震性の低い建物に下宿し、家具も固定していなかったこと。そして、近所の人たちと交流が少なく、生き埋めになっても気付いてもらえず、救助が遅れたことだ。

この例だけを見ても、備えが少ない若者は危険な状況に置かれることは明らかだ。もし、備えもなく南海トラフ地震に襲われ、水さえ手に入らない状況になったら、近所の助け合いの輪に加わっていない若者は非常に危険だ。

しかし、私が最も心配しているのは若者が直面する「現在の危険」じゃない。備えることが習慣になっていない世代が次々と増えていき、社会全体の防災意識が低くなってしまうことだ。

南海トラフ沿いでは東南海地震が比較的周期的に発生している。その周期を考えれば、二十～三十年後に次の東南海地震が起こる可能性が高い。その時に今の十代、二十代、三十代といった世代が十分に備えているかどうかが不安だ。

備えは習慣化することが大切。急に「防災グッズをそろえよう」と買い出しに行って備蓄品をそろえても、一年後にはたいてい忘れてしまう。

備蓄品を生活の中で少しずつ使っていき、減ったら補充する、という習慣ができているかどうかが鍵。阪神大震災や東日本大震災の記憶が少しずつ薄れてしまったとしても、備えが習慣化し、生活の中に根付いていれば社会全体の防災力も高まるはずだ。

私自身を振り返ってみても、一人暮らしをしていたころは、水くらいしか備蓄していなかった。でも、結婚し、子どもができると、「家族を守らなければ」と考え、備えることが習慣づいた。

家族ができたとき、家を買ったとき、子どもが学校に上がるときなど、生活が変わる節目節目が備えに踏み出す好機。新しい生活に防災を組み込んでみることを提案する。

節目を契機にそういう生活を続けているうちに、「防災」と肩肘を張らずに備えができるようになると思う。

今は備えに踏み出すことが難しい若者には、頭の片隅でこのことを覚えておいてほしい。

☆先生と一緒に考えた

水の地名 注意して　耐震補強しっかり

福和伸夫 名大教授

六月末、名古屋・栄のオアシス21で災害ボランティア団体などが開いた「防災フェア」。名古屋大減災連携研究センターの福和伸夫教授によるワークショップ。ＯＳ☆Ｕのまさみんとやすみんが、オレンジ色の応援団のユニホームで参加した。

福和教授　「皆さん、何か自慢できる防災対策はある？」

まさみん　「うーん。ないですね」

やすみん　「テレビや棚に転倒防止器具を入れてます！」

福和教授　「ほぉ！　やすみんは良いね。じゃあ、家のある場所はどうかな。名古屋駅の東側？　西側？　地名に水にまつわる漢字入ってない？　川とか池とか」

まさみん　「私の家。西側で、水関係の漢字入ってます」

福和教授　「西側って標高が低いんだよ。もともと湿地や海岸を埋め立てた所もある。水の地名は、液状化や津波の危険性が高い場合が多い。まさみん、あなた特に備えなきゃ！　水道もガスもライフラインはなかなか復旧しないよ」

まさみん　「水を二㍑入りのペットボトルで六本分くらい置いてまーす」

福和教授　「十二㍑。自信ありそうだね。でも、一日一人あたり二㍑必要。親やきょうだいと同居？　一日か二日で終わっちゃう。将来、東京の芸能界で活躍するかもしれないけど一人暮らしって大変。冷蔵庫の中身はジュースくらいでしょ？　コンビニが冷蔵庫代わりの若者も多い。地震が起きたら流通が止まって何日間も食べ物が届かない。備えないと」

やすみん、まさみん　「私たち地元のアイドルとして頑張っていくから大丈夫」

福和教授　「いやいや。南海トラフ巨大地震って聞いたことあるよね。今後五十年以内に発生する確率は90％くらい。愛知県の被害は大きい。ちなみに名古屋市内にいる消防士は何人か？」

まさみん　「二百人くらい？」

福和教授　「二千人が正解。ただ、この人数で消せる火事はせいぜい六十カ所。救急車も四十五台くらいしかないから、何千人という負傷者は救えない。まずは自分の家から火を出さず、けがをしないこと。火災や津波の危険があるなら、安全な場所に逃げる。そのために、家が倒れて下敷きにならないように、耐震補強をしっかりしてください！」

◇

福和教授のちょっと意地悪な質問の数々も、若者の命を思ってこそ。「アイドルが本気で防災を実践してくれれば、ファンに伝わると思うんだよ。頑張って」。ステージを降りた後に福和教授から二人は励まされて「ファンの見本にならなきゃ」と決意した。

名古屋大の福和伸夫教授㊧から防災について学ぶＯＳ☆Ｕのメンバーら＝名古屋・栄のオアシス21で

次回は、8月5日に掲載します。

(c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています